



『論語入門』

昨年来、『論語』がブームなのかなと思っていたら、やっぱりブームらしく、今年もイイ入門用の新書が出た。その一つが、井波律子先生（国際日本文化センター名誉教授）の『論語入門』（岩波新書、2012）である。

ちなみに『論語』は、1年の古典では11月ころに学習する予定であるが、中学校の時には、既にいくつかの条を学んでいるはずである。例の「子はいく（のたまはく）…」というやつがそれ。

さて、その井波先生、「本質的に孔子は身も心も健やかにして明朗闊達、躍動的な精神の持ち主であった。いかなる不遇のどん底にあってもユーモア感覚たっぷり、学問や音楽を心から愛し、日常生活においても美意識を発揮するなど、生きることを楽しむ人だったのである。『論語』をじっくり読み、こうした孔子の稀有の魅力を感じるとき、誰しも元気がわいてくるに相違ない。」と述べておられ、そのような視点から『論語』を読み解いたのが本書である。教科書にも載っているし、江戸時代に朱子学を通じて「道徳」の一端を担ったが故に、なにか堅苦しいイメージのある古典ではあるが、確かに井波先生の解説を読んでいると、重々しい漢文の背後に、明るくおおらかな孔子の人柄が見えてくるようでおもしろい。まだ読み始めたばかりだが、読んだばかりの一節を引用してみよう。

*

- 子曰、仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣。
- 子曰く、仁遠からんや。我仁を欲すれば、

斯に仁至る。

○先生は言われた。「仁は遠い所にあるものだろうか。いや、自分が仁を求めさえすれば、仁はたちまちここにやってくる。」

仁は誠実な思いやりや人間愛など、さまざまな要素を包括した大いなる徳義をいい、仁者とはこうした徳義を体現した人物をいう。孔子はここで、大いなる仁の徳義は高邁で容易に手のとどかないものだと、しり込みする弟子たちに向かって、仁は手のとどかないものではない、自分が体得したいと強く求めさえすれば、仁のほうから目の前にやってくるのだよと、励ます。澆刺とした力強い言葉である。仁というつかみにくい理念を、擬人化したようなこの言葉には、意表をつく面白さがあり、口で唱えてみると、晴れ晴れした愉快的気分になってくる。

*

最初が白文、次が書き下し文（今勉強しているものとは異なるが…）、そして井波先生による訳とその解説という構成で、146条が紹介されている。まずは訳を読んで、それから書き下し文→白文（場合によっては省略可）→解説という順で読むと分かりやすい。

「仁」は孔子の目指す理想で、授業では「人間愛」などと伝える超重要概念である。しかし、この例文「我仁を欲すれば、斯に仁至る。」を何度も口ずさんでいると、なぜか「仁」が、つまり人を愛するということが身近に感じられて、先生の言葉通り、「晴れ晴れした愉快的気分になってくる」から不思議である。